

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第2回

Residence of Prince Asaka 1933—

旧朝香宮邸は1933(昭和8)年に、宮内省内匠寮たくみりょう工務課の監理により竣工しました。基本設計は内匠寮が、内装はアンリ・ラパンが担当し、ルネ・ラリックらのフランス人デザイナーも参加しています。当時、建築・庭園・土木などを司るエリート集団であった内匠寮の技師で、朝香宮邸の設計担当を務めた権藤要吉は、1925年から26年にかけて研究のため欧米へ派遣されており、パリのアール・デコ博覧会の会場も実際に見学しています。朝香宮同妃両殿下は宮邸の建築にご熱心で、妃殿下はフランスからの手紙を翻訳されたり、暖炉のグリルのデザインをなされるなど積極的に設計に関わられました。

建物の一階部分は、お客様を迎える公的な空間として、二階部分はご家族の私的な空間として設計されています。一階正面玄関の扉は、ラリックが設計したもので、このガラスの女性像は当館でしか見ることができません。玄関床のモザイク・タイル(図1)は内匠寮の制作によるもので、アール・デコ博のパヴィリオンつぎのまの床の模様と酷似しています。大広間、大客室、その間でつなぎの役目をする次室そして大客室の奥へと続く大食堂は、扉や壁面、マンテルピースの各所にアール・デコ様式が反映され、ラパンのデザインした香水塔やラリックのシャンデリアで飾られています。

二階のベランダからは庭園が見渡せます。ベランダに沿う形で、殿下の寝室、浴室、妃殿下の寝室が並んでいます。東南角には、ラパン設計の殿下の書斎があります(図2)。書斎は八角形の空間で天井はドーム型になっています。部屋の中央にはラパンがデザインした机と絨毯が配され、その下の床は円形に区切られており、机を自由に回転させることができます。

昭和の初期に日仏両国の人たちが、アール・デコという一つの様式を邸宅という空間に結実させたことは、文化の融合という観点からも貴重な遺産といえるでしょう。旧朝香宮邸は、平成5年に東京都指定有形文化財(建造物)に指定されました。(横江)



図1. 正面玄関ホールのモザイク・タイル

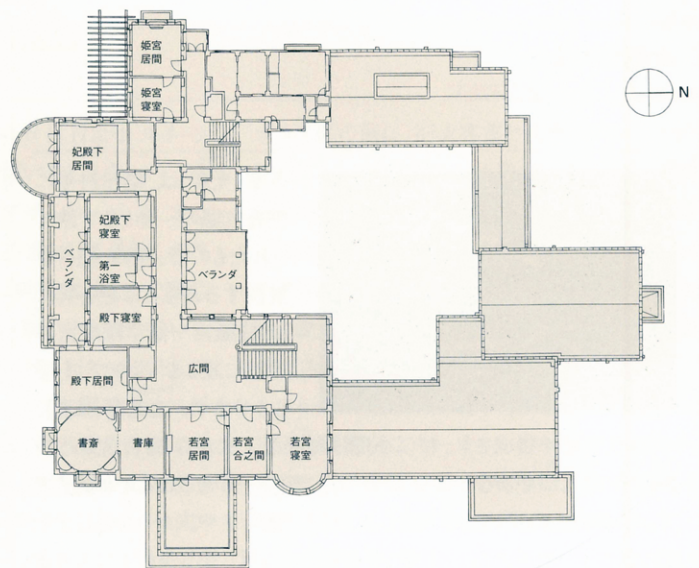


図2. 旧朝香宮邸2階平面図

0 1 5 10 20m